

英語教育をイノベーションするスーパー・ティーチャー養成モデルの構築
ーカナダ・ビクトリア大学におけるハイブリッド型 TEFL 研修を含む英語プログラムー

報告書

報告書本体.....	1
別添① 模擬授業の分析.....	12
別添② BEVI を利用した学びの評価.....	17

0. はじめに

世界のグローバル化を受けて、英語での実用的なコミュニケーション能力の養成が求められて久しい。この間、英語教育においてもさまざまな改革・取り組みが行われ、特に現場レベルでは指導法の試行錯誤が続いたが、いずれも目立った成果があがっているとは言い難い。いかに国・行政のレベルで優れた教育改革が推進されたとしても、外国語教育における革新的な指導法が提唱されたとしても、それを教室で形作りことができる人材、すなわち「英語教員」の存在がなければ無意味である。

大阪教育大学（以下、「本学」）ではこれまでも高度な英語力と指導力を兼ね備えた教員を輩出してきたが、これからの時代で求められる英語使用者の育成に貢献できる英語教育を実現するためには、さらに高いレベルでの英語運用能力・英語授業実践能力・異文化理解力を兼ね備えて、それらを学習者の実状・多様性にあわせて柔軟に活用できるような英語教員の養成が必要不可欠である。

本報告書はそのような英語教員（スーパー・ティーチャー）を養成する一環として、上述のような能力の獲得につながるハイブリッド海外研修を開発して、それを教員養成の課程に組み込むことを目指した取り組みについてまとめたものである。

1. 事業概要

本学教員養成課程において英語教員を目指す学生が、カナダにある協定校ビクトリア大学の TEFL（英語教授法）研修を、オンラインで7週間、現地で5週間のハイブリッド形態で受講し、多文化社会の中で高度な英語運用能力（CEFR B2～C1）と最新の英語教授法を習得する。卒業後は学校現場のリーダーとして日本の小中高における英語教育改革を推進する人材となる。本事業はこの研修を教育課程に組み込むための調査研究プロジェクトである。昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響でカナダへの渡航が叶わず、12週間の研修全てオンラインで実施されたが、本年度は計画通りにハイブリッド形態で行われ、参加した10名全員が TEFL Certificate を取得した。

2. 事業につながる課題の認識

加速するグローバル化の時代に英語は国際共通語（lingua franca）としての地位を確立しているが、日本人の英語力はアジア諸国の中でも非常に低いレベルにとどまっている。その解決のため、いわゆる「使える英語力」、すなわち「英語によるコミュニケーション能力」の向上を目指し、この間、国をあげて英語教育改革を推進してきているが、目立った成果を上げているとはいえない。その大きな原因のひとつとして、英語教員の英語力および英語教授スキルが十分ではないことが挙げられる。

本学では第3期中期目標・計画（2016（平成28）年度～2021（令和3）年度）において英語教員を目指す学生に、英語教員としてのベースとなる確かな英語力を在学中に身に付けさせるため、CEFR B2 レベルに相当する「英検準1級相当」の取得を促進し、最終の3

年間で平均 80%前後の学生がこれを達成するという成果をあげている。しかしながら、今後小学校、中学校および高等学校において、コミュニケーション能力の育成を主眼とする授業を展開するためには、CEFR B2 レベルを超える英語力を柔軟に使いこなす英語教員の養成が不可欠である。加えて英語教授スキルについては、国内の英語教育学だけではなく、広く最新の第二言語習得理論に裏打ちされた「英語による英語の授業」を実行できるだけの知識とスキルを身に付けさせることが不可欠である。

また英語によるコミュニケーションを行う際には、単に高い英語力だけでなく、文化の違いを認め、柔軟に対応する「異文化理解力」あるいは「多文化共生力」も重要であることを忘れてはならない。在学中にそのような「総合的な英語教授スキル」を身に付けるためには、日本を飛び出し、実際に英語圏に身を置き、異文化の摩擦の中での「英語によるサバイバル体験」を経験することがどうしても必要となってくる。

3. ゴールイメージ

本事業は 2. であげた課題を解決するために、本学で中高英語教員・小学校教員を目指す学生がオンライン・オフラインを組み合わせるとータルで 4 ヶ月程度のスパンで英語・英語指導法を学ぶ研修を開発して、そこから得られる高度な英語授業実践力だけでなく、現地での生活等から得られる高い異文化理解・多文化共生力をも兼ね備えた、総合力に優れた英語教員の養成を目指すものである。具体的には以下の 5 つを達成すべきゴールとして挙げた。

① 英語運用能力（4 技能）の向上

オンラインでの 7 週間の英語指導法研修（国内）と英語力強化に特化した 4 週間＋英語指導法短期集中研修 1 週間の計 5 週間の現地研修により英語漬けの毎日を過ごすことで、「英語で英語を教える」ための実践的な英語力を身に付ける。

② 最新の英語教授法の習得

TEFL コース内で最新の言語習得・教授理論と実践方法を学び、関連するワークショップ（英米文化・文学）に参加する。さらに現地の学校で TESOL（Teaching English to Speakers of Other Languages：英語を母語としない者に向けての英語教授法）の授業を視察し、「生きるために必要な英語」を教育する現場を通じて「使える英語」の重要性を認識する。

③ 学校における多文化教育のための異文化体験（5 週間のホームステイ）

現地の家庭にホームステイすることにより、コース外でも英語を使用するとともに、ホストファミリーとの交流を通じて異文化を体験する。また生活の中での英語を学ぶだけでなく、文化の違いから生じる誤解や小さなトラブルを「コミュニケーション」で解決する術を体得する。

④ 英語教育のプロとしての自負、外国語教員の使命としての学び続ける姿勢の醸成

参加者は英語圏で研修を受けることにより、実践的な英語運用能力を向上させ、教授スキルを習得し、英語教員としての自信を獲得する。同時に、外国語の学習には様々なアプローチで学習を継続することが肝要であることに「英語学習者の自己」として気づき、「学び続ける教師」へと成長する。

⑤ 国際的通用性を有する「TEFL Certificate (修了証)」の取得

参加者はオンライン7週間（56時間）、現地5週間（150時間）の研修を修了することにより、TEFL Certificate（修了証：Certificate of Completion in Advanced Skills in Teaching English as a Foreign Language）を取得する。この修了証は参加者たちが高度な英語運用能力と英語教授法を身に付けた証となる。

さらに、上記のようなゴールを達成できるハイレベルな英語教員の養成は、一過性のものではなく教員養成カリキュラムの中に組み込み、体系的に実施していくべきものであることから、本研修を第4期中期計画期間（2022（令和4）年度～2027（令和9）年度）において、以下のような流れで4年間の教育課程に組み込む予定である。

- ① 教員養成課程の英語教育コース専門科目「第二言語習得論」を本研修を単位化する際の対象科目として設定して、同授業に含まれるべき内容も踏まえて、英語指導法研修の内容を精選する。
- ② 本事業によって研修に参加した学生の学習成果を検証して、研修単位化の対象となる「第二言語習得論」のシラバスを作成する。
- ③ 本学教務課と研修実施時期と単位認定方法について検討して、令和5年度以降に研修単位化科目としてカリキュラムに実装する。その際、コースとして留学促進期間として設定した3回生の第4ターム（12月～翌2月：ギャップターム）を効果的に活用する。

このように本調査は、いかにして実効性のある海外研修を修業年限内に組み込み、かつ最大限の学習効果を上げることができるか、言い換えれば、学校現場において英語教育をリードできる内容を含む「英語のスーパー・ティーチャー養成モデル」をいかに構築するかを検証するものである。

4. ゴール達成のための取り組み

上記ゴール達成のための研修先として、10年来本学の英語教員研修事業で現職教員、大学院生を受け入れてきたカナダのビクトリア大学を選定して、現職教員向けに展開されていたTEFL研修を学部3回生向けにカスタマイズし、新たな「ハイブリッド型TEFL研修（オンライン7週間56時間+現地5週間150時間）」を開発することとした。本研修の修了者は高度な英語力や英語指導力、異文化理解・多文化共生力を身に付けつつ、TEFLのCertificateを手にすることができる。そして大学卒業後は、学校現場で「英語で英語を教

える」コミュニケーション主体の授業を実施して、同時に ALT との協働授業も発展的に開発できる「スーパー・ティーチャー」となり、現場の英語教育をリードし、アジアでトップレベルの英語力をもつ子どもたちを育てることを目指す英語教育改革に大きく貢献する。また事前・事後指導、評価指標等を含めた本研修を「英語のスーパー・ティーチャー養成モデル」として構築し、他の教員養成大学等に提供することにより、日本全体の英語教育改善に波及効果をもたらすものである。

研修の開発が始まった 2021（令和 3）年度から本年度の研修実施に至るまでの流れは以下の通りである。

【研修内容の開発・検討～2021 年度研修実施】

まずは 2021 年 5 月から約 3 ヶ月かけて研修内容の検討を行った。将来的にこの研修を本学の英語教員養成カリキュラムの一部に組み込むことを念頭に置いて、教科教育法科目や専攻専門科目で取り扱われている内容や英語教員養成コアカリキュラムの内容を整理して、本研修に含まれるべき内容について、研修先であるカナダ・ビクトリア大学担当者とオンラインミーティング及びメールでのやりとりを通して検討した。

一定の研修内容が定まった 8～9 月に、対象となる学生（本学教員養成課程英語教育コース 3 回生以上）に募集に関わる情報を送付して研修参加者募集を開始した。10 名の参加者が決定した 10 月以降、複数回のオリエンテーションが実施され、12 月から 1 月にかけてオンライン英語指導法研修が行われた。しかし年末にかけて新型コロナウイルス感染症の影響で渡航を断念せざるを得ない状況になったため、カナダでの研修をオンラインに移行すべく、ビクトリア大学と内容・日程の再調整を行い、研修参加者に対しても研修内容の変更や必要な手続き等の周知のため、再度オリエンテーションを実施した。その上で 2 月から 3 月上旬にかけて、オンラインでの英語・文化研修と外国語指導に関するワークショップを行い、模擬授業等を中心とした指導法研修で締めくくった。途中で心身の不調により 1 名が離脱したが、残る 9 名は最後まで研修をやり遂げ、TEFL Certificate を授与された。各種の成果検証を行ったところ、スコア上の英語力の伸びは確認されなかったが、授業実践力においては説明・例示の端的さやより内容面を意識した授業展開、特に言語材料の使用場面に関する工夫について向上が見られた。また異文化理解・多文化共生力についても、もともと国際性や多様な価値観の受け入れについては高いものを持っていた参加者であったが、本研修参加を通してそれらがさらに高まったことが示された。

新型コロナウイルス感染症の影響で実施形態を変更せざるを得ないなど、困難の多い研修であったが、参加者は前向きに取り組み一定の成果を残した。また授業実践力や異文化理解力については向上が見られ、研修内容についても妥当性が確認できた。

【2022 年度研修内容の検討～参加者決定】

2021 年度の研修が上記のとおり新型コロナウイルス感染症の影響で全編オンライン実施

にせざるを得なかったことから、2022年度は本来のハイブリッド型研修の実施を確実に実施することが大きな目標となった。これに向けて、8月上旬にかけて研修内容をビクトリア大学も交えて再度検討して、一部ワークショップの内容を変更する微修正はあるものの、基本的に前年度と同様のフォーマット・内容で研修を実施することを決定した。

続いて9月から10月にかけて、昨年と同様に対象となる学生（本学教員養成課程英語教育コース3回生以上）に向けて周知を行い、参加者を募集した。10名の参加者が決定した後、複数回のオリエンテーションを実施して、12月上旬からの研修開始に備えた。また今年度は2月からのカナダでの研修の実施可能性がかなり高い状態であったので、旅行会社や現地エージェントを交えた渡航に関する準備も並行して行われた。

【オンライン英語指導法研修】

オンライン英語指導法研修ではビクトリア大学が提供する Learning Management System (Brightspace) 上に提示される課題に取り組む非同期型学習が週5時間と、Zoomを用いた同期型学習が週3時間の週あたり計8時間の学習に7週間取り組み、外国語教授法の最先端について学ぶ。取り扱われた内容は第二言語習得理論の基本、基礎的なところから最新までをカバーした指導法の概観、具体的な活動や指導案作成、四技能五領域や文法・語彙の指導についてである。オンライン研修の内容は2月以降の現地での研修やワークショップに連動しており、複数回の課題提出で学生の理解状況が適宜確認されていた。

【カナダ・ビクトリア大学における現地研修】

カナダへの渡航後は4週間の英語集中トレーニングと2回の現地学校見学、4回の外国語教育関連ワークショップへの参加、および最終週の指導法集中トレーニングが実施された。英語集中トレーニングは、ビクトリア大学の English Language Centre が提供する Monthly English Program に参加した。各々の英語力に応じてさまざまな国・環境からの学習者からなるクラスに配属されて、ホームステイでの滞在も含めて英語漬けの環境下で英語・異文化理解力の向上に努めた。並行して実施された学校見学では、現地小学校と高校への訪問でそれぞれの授業運営や学校運営、校舎の様子など学校のあり方全般について、その背景にある考え方まで含めて新しい発見が多くあった。またワークショップでは Team Building・Using Drama Techniques in English Language Environments・Intercultural Communication・English Literature in English Language Education について学んだ。最終週の指導法集中トレーニングでは、外国語指導におけるクラス運営や評価、教師としてのキャリア形成について学び、締めくくりとして模擬授業に取り組んだ。

【成果検証測定】

本研修は参加者の学習状況の把握と研修自体の評価のため、様々な角度から成果検証を行なっている。英語力については IELTS の公式テストを研修前後に受験させた。英語授業

スキルについては研修前後に指定されたテーマ・題材に基づき模擬授業を各自で録画して提出させて、外国語授業の観察・評価に用いられる Foreign language interaction analysis (Flint)を用いて本学教員が評価して、参加者にフィードバックした。異文化理解・多文化共生能力の測定については留学効果検証テストとして使われている BEVI-j を受験させた。

5. 取り組みの成果

本事業の取り組み成果は、3.で挙げた参加者にとってのゴールがどの程度達成されたかが1つの大きな指標となる。以下、個別に検証を行う。

【英語力運用能力の向上】

英語力測定ツールとしては、英語力証明のグローバルスタンダードテストとして世界各国の10,000を超える教育機関、企業、国際機関、政府機関などで採用されている IELTS (International English Language Testing System) の公式テストを利用した。なお IELTS は、①アカデミック・モジュール (大学や大学院への留学や就職を希望している受験者向けのテスト形式) と、②ジェネラル・トレーニング・モジュール (オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、英国への移住または研修を希望している受験者向けのテスト形式) に分かれているが、今回はカナダの大学で開講される TEFL (英語教授法) 研修を受講することから「アカデミック・モジュール」を選択した。

参加者は、研修前 (2022年11月13日) 及び研修後 (2023年3月14日) に IELTS を受験した。4技能 (ライティング、リーディング、リスニング、スピーキング) がテストされ、試験結果は1.0から9.0までの0.5刻みで、各技能のバンドスコアと総合評価としてのオーバーオール・バンドスコアが通知される。参加者の各技能のバンドスコアの平均と総合評価としてのオーバーオール・バンドスコアの平均は表1の通り。

表1

	事前	事後	差
リスニング	5.85	5.90	0.05
リーディング	5.80	6.25	0.45
ライティング	5.50	5.80	0.30
スピーキング	5.05	5.40	0.35
オーバーオール・バンドスコア	5.55	5.95	0.40

総合評価としてのオーバーオール・バンドスコアの平均は、事前は「5.55」であり、事後は「5.95」である。これは IELTS の評価基準では「中程度のユーザー」 (バンドスコア5) と「有能なユーザー」 (バンドスコア6) の中間に位置するが、事後のスコアは限りなく「有能なユーザー」に近い値である。

「中程度のユーザー」は、「不完全だが英語を使う能力を有しており、ほとんどの状況でおおまかな意味を把握することができる。ただし、間違いを犯すことも多い。自身の専門分野では、基本的なコミュニケーションを取ることが可能」なレベルである。また、「有能なユーザー」は、「不正確さ、不適切さ、誤解もみられるが、概ね効果的に英語を使いこなす能力を有する。特に、慣れた状況下では、かなり複雑な言葉遣いの使用と理解ができる」レベルである。つまり今年度の参加者は、英語教師として基本的なコミュニケーションを取ることが出来るレベルだということができる。また事後テストの結果が事前テストの結果から 0.4 ポイント上昇して、グループ全体としては「有能なユーザー」に限りなく近づくレベルにまでなったことは、今回の研修の大きな成果の 1 つと言える。

ここで、今年度と昨年度の参加者との比較を行いたい。昨年度の参加者の各技能のバンドスコアの平均と総合評価としてのオーバーオール・バンドスコアの平均は、表 2 の通りである。

表 2

	事前	事後	差
リスニング	5.44	5.33	-0.11
リーディング	5.78	5.78	0.00
ライティング	5.50	5.61	0.11
スピーキング	5.44	5.11	-0.33
オーバーオール・バンドスコア	5.61	5.56	-0.06

昨年度は、全体的に見て事前と事後の間にスコアの変動が見られないという結果であった。本プログラムでは、TEFL 研修を前半はオンラインで、後半は実際にカナダに渡航し、現地で受講することになっているが、昨年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で渡航中止となり、全プログラムがオンラインでの受講となった。現地で実際に英語を使う機会を失ったことで、モチベーションを維持することが困難となり、特に、リスニングやスピーキングというオーラルコミュニケーションのスコア上昇につながらなかった可能性が示唆される。

参加者の個別のスコアは、表 3 の通り。

表 3

	技能	スコア		変化			技能	スコア		変化
		事前	事後					事前	事後	
		2022/11/13	2012/3/14					2022/11/13	2012/3/14	
1	リスニング	5.5	5.5	0		6	リスニング	6.5	7	0.5
	リーディング	5	5.5	0.5			リーディング	6	6	0
	ライティング	6	5.5	-0.5			ライティング	6	5.5	-0.5
	スピーキング	4	5	1			スピーキング	5	5.5	0.5
	Band Score	5	5.5	0.5			Band Score	6	6	0
2	リスニング	6	6.5	0.5		7	リスニング	5.5	5.5	0
	リーディング	6	7	1			リーディング	5.5	5	-0.5
	ライティング	6	6.5	0.5			ライティング	5	5.5	0.5
	スピーキング	5.5	5	-0.5			スピーキング	4.5	5	0.5
	Band Score	6	6.5	0.5			Band Score	5	5.5	0.5
3	リスニング	7	6	-1		8	リスニング	5	6	1
	リーディング	6.5	7.5	1			リーディング	5	5.5	0.5
	ライティング	5.5	6.5	1			ライティング	5.5	6	0.5
	スピーキング	6	6	0			スピーキング	4.5	5.5	1
	Band Score	6.5	6.5	0			Band Score	5	6	1
4	リスニング	6	5.5	-0.5		9	リスニング	5.5	5	-0.5
	リーディング	5.5	6.5	1			リーディング	5.5	6	0.5
	ライティング	4	5	1			ライティング	5.5	5	-0.5
	スピーキング	5	5.5	0.5			スピーキング	5	5	0
	Band Score	5	5.5	0.5			Band Score	5.5	5.5	0
5	リスニング	6	6.5	0.5		10	リスニング	5.5	5.5	0
	リーディング	6.5	7	0.5			リーディング	6.5	6.5	0
	ライティング	6	6	0			ライティング	5.5	6.5	1
	スピーキング	6	6	0			スピーキング	5	5.5	0.5
	Band Score	6	6.5	0.5			Band Score	5.5	6	0.5

【最新の英語教授法の習得：詳細は別添報告書①を参照】

本研修の核である英語教授法の習得およびその実践スキルについては、研修前後に参加者が各自で実施した模擬授業のビデオを本学教員が視聴・評価したものにに基づき成果検証を行った。実施概要、評価・分析方法、詳細な結果については別添の報告書に委ねるが、全体的な結果として ICT のより効果的な活用、場面・状況に応じたより高度な英語での指示の出し方・語りかけ、訂正フィードバックの提示、アクティブラーニングを促す BOPPPS (Bridge In, Outcomes, Pre-Assessment, Participatory Learning, Post-Assessment, Summary) モデルに基づく授業展開等、研修前には見られなかった高度な指導技術が研修後には多く見られた。

【学校における多文化教育のための異文化体験：詳細は別添報告書②を参照】

研修参加者の異文化理解・多文化共生能力がどの程度高まったかについては、留学効果検証テストとして使われている BEVI-j を受験させた。こちらも詳細については別添の報告書に委ねるが、参加者の専攻のためもあってかともとも国際性や多様な価値観の受け入れについては高いものを持っていたが、本研修参加を通してそれらがさらに高まったことが

示された。

【国際的通用性を有する「TEFL Certificate（修了証）」の取得】

参加者 10 名全員が研修を完遂して、Certificate of Completion in Advanced Skills in Teaching English as a Foreign Language を取得した。

6. 研修の教員養成課程カリキュラムへの組み込み

前述の通り、本研修は一過性のものではなく教員養成カリキュラムの中に組み込み、体系的に実施していくべきものである。これを実現していくための手続きを9月から順次取り組んでいった。本年度の実施した具体的な手続きとしては以下の通りである。

- 本学における海外短期研修の単位認定科目について教務課を交えて見直して、本研修の単位化についても同様の過程で認定が可能であることを確認。
- サンプルシラバスを作成して、教務課のチェック・助言により修正。
- 令和5年度の本学教員養成課程英語教育コースの専門科目「第二言語習得論」のシラバスに、上記により修正された内容を掲載。

これにより、本年度研修参加者で希望するものは、令和5年度の「第二言語習得論」を履修して、成果発表会での発表など必要な課題に取り組むことにより、同授業の単位が認定される。このような形で、本学の英語教員養成カリキュラムへの組み込みが実施された。

7. 総括・今後の課題

本事業は英語教員を目指す学生が将来的に分野をリードすることができるだけの英語力・英語授業力・異文化理解力を身につけるための海外研修を教員養成課程に組み込むことを目指したものである。昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響で全編オンラインでの実施となり、必ずしも完全な形で研修とはならなかったが、本年度はいくらかの制約は残りつつも、カナダでの現地研修まで含めて予定されていた研修を全て実施することができた。本学のカリキュラムへの組み込み（単位化）についても一定程度目処がたっており、ここまでのことが実現できたことは、1つの大きな成果である。

今回の研修で目指したスーパー・ティーチャーとして必要な能力の育成については、英語授業力と異文化理解・多文化共生能力については、それぞれ研修前後の模擬授業の分析と BEVI-j の結果から一定の上昇が見られた。英語授業力については本研修の内容の中核を構成するものであり、この点について上昇が認められたことは、本学とビクトリア大学がこれからの日本の英語教員に必要な知見を盛り込んで共同開発した研修内容を確実に身につけてくれたことの表れであり、確実に研修参加者のこれからの英語教員としてのキャリアで活かされるものである。異文化理解・多文化共生能力の推移については、オンライン

で実施した昨年度と大きな違いは見られなかったが、これは国際性や多様性への対応が元々高かった本学英語教育コースの学生ならではと言えよう。数値変化の更なる精査やインタビューを通して、実際にカナダに渡ったことでどのような世界観・価値観の変化があり、それらを教職にどのように活かしていけると考えるかについては、今後更なる検討が必要である。

さらに今回の研修結果で特筆すべきは参加者の英語力の伸びである。多くの学生が研修前後で IELTS Overall 0.5~1 の上昇を示しており、これは昨年度のオンライン研修では見られなかった結果である。今回の参加者は新型コロナウイルス感染症のパンデミックが始まった直後に大学に入学して、以来3年間さまざまな制約の中で学問に取り組んできた。その制約には夢見ていたはずの海外への挑戦も含まれており、今回の研修への参加のモチベーションは非常に高い集団であったことは、参加者からの聞き取りでも明らかである。カナダへの渡航に引率として同行した教員の観察では、成田空港からバンクーバーへのフライトが離陸して以降、彼ら参加者の中でのコミュニケーションもほぼ英語オンリーとなっていた。クラス配属やホームステイなど、さまざまな困難にぶつかったとの報告もあったが（当然これらも全て英語である）、少しの励ましで彼ら彼女らはその困難を解決していった。学生の大学での学びやキャリアに直結した今回のような研修が、その研修を実施するのに適した国外という環境と学生の高いモチベーションと結びつくことで、このように短期間で驚くべき英語力（+英語授業実践力・異文化理解力）の向上につながったことは、何より今後も研修を実施していくスタッフの支えとなるものである。

今後の課題としては、この研修の継続的な実施に向けたさまざまなリソースの確保がある。今回の研修は教員養成の中にハイブリッド型 TEFL 研修を組み込む取り組みということで、実施主体となっている英語教育コースから多くの教員が企画・運営チームに加わっているだけでなく、学生派遣に関わる事務を取り扱う国際室からも多くの支援を受けており、カリキュラムへの組み込みについては教務課から多くの助けを受けるなど、学内のさまざまな部署からの助力を受けている。今後このプログラムがカリキュラムの一部として自走するにはどのように効率化を目指していくかを検討する必要がある。また3ヶ月以上に渡る研修ということで、その費用は高額であり、世界的なインフレや円安、航空運賃の高騰と相まって、金銭的要因が学生の参加を阻害する要因となりかねない。一方で現在受けている経済的支援が恒久的に続くものでもないこともまた事実である。研修内容・実施に無駄がないかを不断に確認して必要な見直しを施しつつ、外部資金の獲得、学生への奨学金獲得の奨励などに取り組む必要がある。

8. おわりに

昨年度は全編オンラインでの研修に終わり、今年度こそは学生に海外を体験させてあげたいとの思いで取り組んできたが、目指す形で研修が実施できたことは何よりであった。そして振り返ってみると、その取り組みを助けてくれた何よりのものは、やはり学生のモ

チベーションの高さであった。未来の教員たる本学の学生は、あらゆる面で伸びる可能性を秘めた存在である。しかし今回参加してくれた学生たちは、その可能性を最大限に伸ばすチャンスを逃すことなく、自己の更なる向上に努め続けた。上述した仲間内での英語のみでの会話も含めて、まさに「スーパー・ティーチャー」への道を着実に進んでおり、これから英語教師を目指す学生のロールモデルとも言えるのではないかと、目を細めて見ていた。必ずしも全ての学生がこの研修に参加できるわけではないが、カリキュラムにも組み込まれるこの TEFL 研修を中心として、英語運用・英語授業・異文化理解をさらに高いレベルで実践できる英語教員を養成して、日本の英語教育の発展につなげていくことができると考えている。

スーパーティーチャー養成研修プログラム 研修前後に実施した模擬授業の分析

英語教育部門 篠崎 文哉

1. 模擬授業の目的

本研修プログラムに参加した学生の授業の構成力や模擬授業における指導技術がどのように変容したかを明らかにすること。

2. 模擬授業の概要

研修プログラム開始直前である 2022 年 12 月初旬と、終了直後である 2023 年 3 月中旬に、以下の条件で模擬授業を実施することとした。使用する教材は、指定された検定教科書（中学校 2 年生）とし、言語材料として to 不定詞（名詞的用法）を挙げた。教科書本文を扱うかどうかは単元計画や指導法に鑑みて検討することとした。模擬授業は、各自で動画を撮影し、学習指導案とともにデータを提出することを求めた。なお、模擬授業時に生徒役は配置しない形式とした。

- <条件 1> 50 分授業を構成する各段階の中心的な部分が満遍なく含まれた 15 分程度の模擬授業とすること。例えば、「導入—展開—まとめ」という形であれば、それぞれの段階を含め、導入のみなどとししない。ただし、時間は各段階に均等に配分する必要はない。
- <条件 2> 特に 50 分完結型ではない授業を模擬授業として行う場合は、本時に関わる前回や次回の授業の詳細も学習指導案において説明すること。ここで言う 50 分完結型の授業とは、例えば「導入—展開—まとめ」という形の授業を 1 時間の授業として行うことを指し、50 分完結型ではない授業は、例えば「第 1 次：導入—展開」「第 2 次：展開続き—まとめ」のように 2 時間以上にまたがって行うものを指す。
- <条件 3> ALT 等とのチーム・ティーチングではなく、JTE によるソロ・ティーチングであること。
- <条件 4> ICT 機器を使用する場合は、使用する端末やアプリ、使用するねらいなどの説明を学習指導案に簡潔に記述すること。

模擬授業における学生の変容を検証するため、研修前と研修後に実施した模擬授業は、同じ教材や言語材料とした。

3. 評価・分析方法

研修事前・事後で提出された模擬授業動画と学習指導案を対象に評価を行った。杉森

(2011)を参考に、条件として示していた検定教科書以外の「教材・教具」(主にパワーポイントスライドや板書、ワークシート)、「教師の言葉」(英語使用、日本語使用)、「指導」(指導方法や手順、生徒とのやり取り)、「生徒対応」(仮想の生徒への対応やアイコンタクト、教師の立ち位置)の4観点からコメント作成による評価を行った。

まず、これら4観点から事前に提出された模擬授業動画と学習指導案を分析し、コメントを作成した。次に、事後に提出された模擬授業動画と学習指導案を分析し、事前のものからどのような点において変容が見られたかを中心に評価し、コメントを作成した。そのコメントと研修のプログラム内容を比較し、本研修の成果をまとめた。

4. 結果・考察

本研修参加者の学生は、大阪教育大学において英語科教育法など教科指導に関する授業をすでに履修し、教育実習にも参加済みであった。まず本研修前に行った模擬授業動画と学習指導案を分析した。以下の表1に全体的な傾向をまとめる。

表1
模擬授業と学習指導案(事前)の分析結果の概要

観点	概要
教材・教具	<ul style="list-style-type: none"> ● パワーポイントを用いて、文や絵、動画を提示し、重要箇所を強調したり、生徒の注意を引く工夫をしたりしていた。 ● パワーポイントと板書を使い分けていた。 ● アプリを活用していた(ファイル共有など)。
教師の言葉	<ul style="list-style-type: none"> ● 全体的に英語で授業を行いながら、文法等の説明時など適宜日本語も用いていた。 ● 語彙レベルが生徒に適さないと判断した場合に、日本語を部分的に用いることがあった。 ● タスクなどの活動では、日本語を用いて説明する傾向にあった。
指導	<ul style="list-style-type: none"> ● 生徒との英語でのやり取りの場面が設けられていた。 ● 生徒同士のやり取りの場面も設けられていた。 ● 活動前に丁寧に手順を示したり、自分のことを例にしたりして、生徒にとって活動が行いやすいものになるように工夫していた。 ● 文法説明においても、発問を行い、生徒に考えさせながら進めていた。 ● リスニングを行う場合には、直前に聞き取るポイントを示していた。
生徒対応	<ul style="list-style-type: none"> ● クラス全体を意識して問いかける様子が見られる学生がいる一方、目の前の生徒のみに話す場面が多い学生もいた。

授業の構成や各指導段階の展開、テクニックなど、英語科授業に関する基本的な知識や技能はある程度身に付けていたことがわかった。このような学生が、本研修に参加した。

本研修では、2022年12月5日から2023年1月27日まで、週3時間の同期型授業と5時間の非同期型授業を実施した。ここでは、学生は第二言語習得理論や様々な教授法やテクニック、アクティブラーニングや学習者中心の文法・語彙指導法などを学んだ。現地研修としては、1月30日から2月24日まで、主に英語授業に出席したり、現地の学校を視察したりした。2月27日から3月3日までは、実践的な練習として模擬授業を繰り返し行った。研修終了後の模擬授業動画と学習指導案を分析し、事前のものから特に変化があったものをまとめたものが表2である。

表2

研修実施前から特に変化が見られた部分

観点	概要
教材・教具	<ul style="list-style-type: none"> ● 事前でパワーポイントのみの使用だった学生が、板書も併用する場面があった。 ● タブレット上にワークシートを表示させ、そこに書き込みを行い全体に共有することで、リアルタイムで書き込んだ内容を共有していた。 ● 最近頻繁に用いられているアプリを活用していた。
教師の言葉	<ul style="list-style-type: none"> ● 英語主体で授業を行っていることに変化はないが、その英語の話し方に違いがあった。具体的には、特に聞かせたい部分については、より丁寧に、はっきり、ゆっくりと発音することで、聞きやすいものとなっていた。 ● 事前では活動の説明の場面では日本語を主として用いていたが、事後ではシンプルな英語を用いて説明をする学生もいた。
指導	<ul style="list-style-type: none"> ● 明確な授業の目標を提示する学生が多かった。 ● 事前では内容面に焦点を当てたやり取りやフィードバックが主であったが、事後ではそれに加えて、文法の違いや生徒が発話した言葉に含まれる文法等の誤りに関するフィードバックをし、言語面におけるフィードバックも行っていた。 ● より丁寧な知識の引き出し（スキーマの活性化）を行っていた。生徒の知っている話題を例として用いていた。 ● 歌を用いることで、文法指導であっても生徒が関心を持てるように工夫していた。 ● 活動の種類や方法に関する知識の広がりが見られ、ジグソー法を用いるなど、よりインタラクティブな活動を取り入れていた。

	<ul style="list-style-type: none"> ● 授業全体の構成として、BOPPPS (Bridge In, Outcomes, Pre-Assessment, Participatory Learning, Post-Assessment, Summary) のモデルを取り入れている学生が多かった。 ● 動名詞と不定詞を対比させることで、学習を促す学生がいた。
生徒対応	<ul style="list-style-type: none"> ● 事前では目の前の生徒に話しかけることが多かった学生が、事後ではクラス全体を意識した発問を投げかけていた。

教材・教具については、パワーポイントのスライドと板書を使い分ける学生が増えたことが、様々な授業に共通するという意味において大きな変化であったと言える。また、1人1台端末という環境を意識した授業づくりを行う学生が見られたことから、ICT 活用力がさらに向上したと考えられる。

教師の言葉については、研修前の段階から、英語を基本としながら日本語を適切に用いることができていた。しかしながら、研修後の模擬授業動画を分析すると、英語を用いる場面が増加していることがわかった。特に事前の段階では、タスクなどの説明において日本語を用いる傾向があったが、こういった説明においても英語を用いていた。これは、無理に英語を用いて授業を進めているのではなく、生徒にとって分かりやすい英語を用い、さらに視覚教材を用いて理解を促していたということである。つまり、生徒の実態や目標の設定に沿って、適切に英語と日本語を用いることができるという、高い応用力を身に付けることができたことを示唆するものである。

指導について特に顕著であったのは、BOPPPS (Bridge In, Outcomes, Pre-Assessment, Participatory Learning, Post-Assessment, Summary) というモデルをもとに授業を構成していたことである。このモデルでは、アクティブラーニングを促す仕組みが含まれており、今日求められている授業展開を体現できている。また、前述の英語で行う授業に関して、活動の仕方を生徒が理解できているかを確認する手段として、Instruction Checking Questions (活動のポイントを問う質問) を行うことで、コミュニケーションな側面を保ったまま活動に移行できる工夫も凝らす学生が見られた。

生徒対応として、模擬授業の撮影場所に影響を受けている可能性があるが、生徒とのアイコンタクトをさらに意識する姿が見られた。

5. おわりに

表1にあるように、基礎的・基本的な英語授業法を身に付けていた学生であったが、そのことが本研修の学びをより効果的・効率的にしたものと思われる。さらに、現地での英語学習によって各自の英語力が強化されたことで、授業内での英語使用に余裕を持つことができ、生徒を意識した話し方を心掛けることができたのではないかと考えられる。

参考文献

杉森幹彦 (2011) 「外国語授業分析法の概観と英語授業評価基準の提案」『政策科学』18(3),
29-61.

スーパーティーチャー養成研修プログラム2022

BEVIを利用した学びの評価

大阪教育大学 特任教授 山岡 賢三

1. 研究の目的

2022年度スーパーティーチャー養成研修プログラム（TEFL2022：オンライン留学含むカナダビクトリア大学留学プログラム）に参加した学生を対象に、BEVIの事前事後のアンケート調査を行い、留学前と留学後の学生の意識変化を分析し、TEFL2022を通じた学生の学びの評価を行う。

2. BEVIとは

BEVI(The Beliefs, Events, and Values Inventory)は、心理測定学の基準及び手続(Downing and Haladyna1997; Geisinger、2013; Hubley & Zumbo2013; Robinson、Shaver、and Wrightsman1991, 1999 など)に基づき、1990年代初頭に米国で開発が開始された国際的な心理測定テストで、教育、研究、からリーダーシップ・プログラムやメンタル・ヘルスに至るまで、様々な場面で利用することのできる、使いやすくまた柔軟性に富んだ、強力な分析ツールである。BEVI を活用することにより、学習・成長・変化のプロセスや成果を理解し、それらを促進させることができる。BEVI テストの結果は即座に 20 以上の強力な分析ツール（留学前後の変化、性別・留学等への関心度別の分析など）により確認することができる。

3. 研究の方法

- ①BEVIの事前調査から、広島大学のデータと比較しTEFL2022に参加した学生の特性傾向を分析する。
- ②BEVIの事前・事後調査を比較し、TEFL2022に参加した学生の特性傾向と事前・事後の意識変化を調査する。

4. 調査対象と時期

- ①調査対象：事前調査10名、事後調査名
(TEFL2022に参加した本学英語教育コース3、4回生)
- ②調査時期：第1回事前調査 2022年11月28日～12月5日
第2回事後調査 2023年3月6日～14日

5. 調査内容

以下の17の尺度で、個人の特性を測る。

- 1.人生における負の出来事、2.欲求の抑圧、3.欲求の充足、4.アイデンティティの拡

散、5.基本的な開放性、6.自分に対する確信、7.基本的な決定論、8.社会・情動の理解、9.身体への共鳴、10.感情の調整、11.自己認識、12.意味の探求、13.宗教的伝統主義、14.ジェンダー的伝統主義、15.社会文化的オープン性、16.環境との共鳴、17.世界との共鳴

特に17の尺度の中で以下の国際性の涵養、多様な価値観と関連が強い尺度を注視する。

<中核的欲求の充足>

3. 欲求の充足：経験・欲求・感情に対してオープン、自分・他者・より広い世界に対する気遣い/思いやり（「子どもの早期教育プログラムにもっとお金を費やすべきだ」、「自分が何者なのかを考えることが好きだ」など）

5. 基本的な開放性: 基本的な思考、感情、欲求に対してオープンかつ率直（「自分というものを常に良いと思っているわけではない」、「自分の人生は孤独だと感じている」など）

<批判的思考>

8. 社会・情動の理解: 自己、他者、より広い世界を認識している/オープンである、思慮深く、実用主義、意思が固い、自立の必要性を認める一方で弱者を気遣うなど世界を白黒では捉えない（「不幸な人を救うためにもっと何かしなければならない」、「自分の責任を果たしていない人が多すぎる」など）

<自己の理解>

11. 自己認識: 内省的、自己の複雑性を受け入れる、人の経験/状態を気遣う、難しい思考/感情を許容する（「常に自分をよりよく理解しようと努めている」、「取り組むべき課題を抱えている」など）

12. 意味の探求: 意味を模索する、人生にバランスを求める、耐性がある/根気強い、感受性が高い、弱者への思いやり（「人生の意味についてよく考える」、「人生のバランス感覚をもっとよくしたい」など）

<他者の理解>

14. ジェンダー的伝統主義: 男性と女性はある型にはまるよう創られている、伝統的/単純なジェンダー観やジェンダーの役割を好む（「女性は男性より感情的だ」、「男性の役割とは、強くあることだ」など）

15. 社会文化的オープン性: 文化、経済、教育、環境、ジェンダー/国際関係、政治の分野におけるさまざまな行動、政策及び実践について進歩的/オープンである（「自分とは異なる文化を理解しようと努めるべきだ」、「わが国では、貧富の差が大きい」など）

<世界の理解>

16. 生態との共鳴: 環境/持続可能性の問題に深く関与している。地球/自然界の将来を懸念している（「環境が心配だ」、「所有者が誰であろうとも、この土地を守らなければならない」など）

17. 世界との共鳴: さまざまな個人、集団、言語、文化について学ぶこと/出会うことを努力している。グローバル社会への関与を望んでいる（「世界の出来事についてよく知っておくことが大切だ」、「自分とは大きく異なる人々の集団といることが快適だ」など）

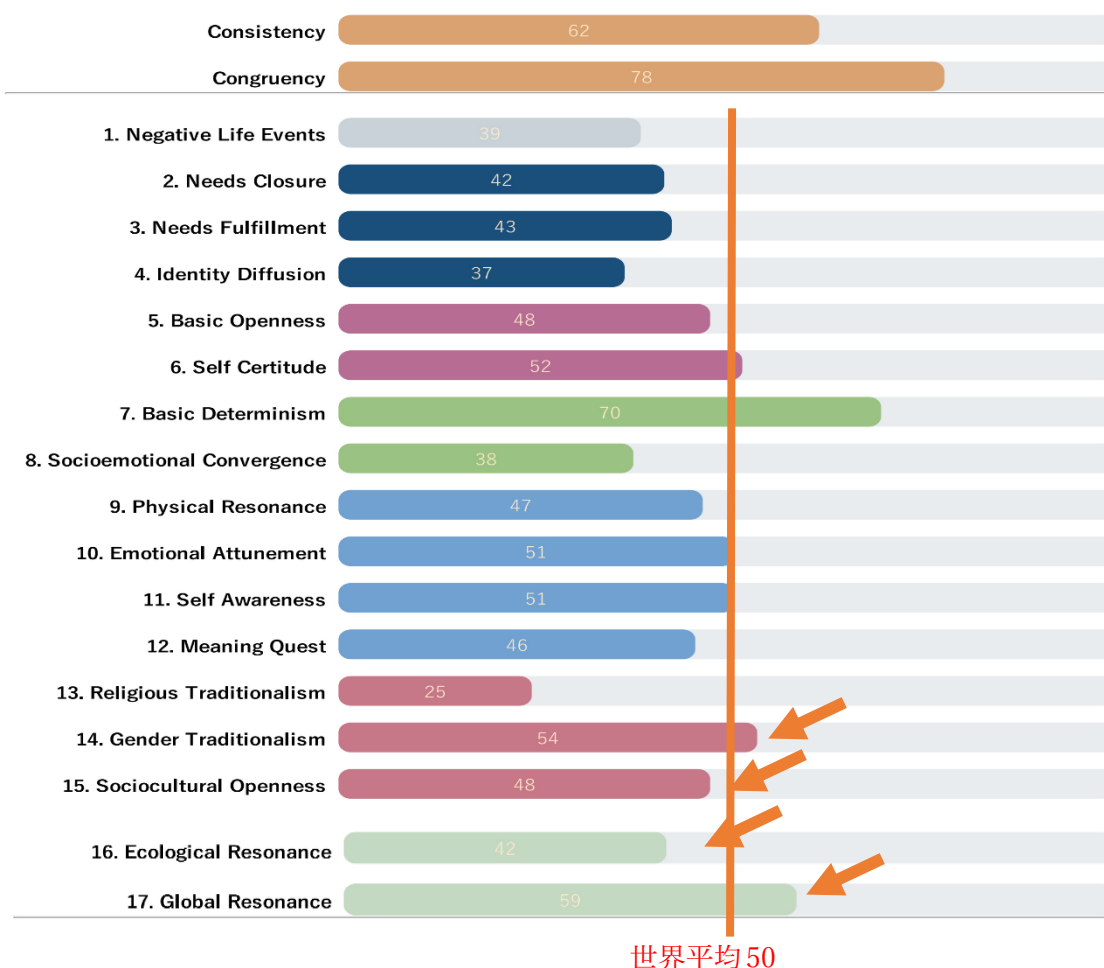
<出所：BEVIの尺度<https://jp.thebevi.com/about/scales/>>

6. BEVI 事前調査の結果と広島大学とのaggregate profileの比較

今回の本学調査対象が10名という少人数であるため、広島大学が2021年度に全学部の1回生1510名を対象に調査したデータと比較する。広島大学の入学者は主に西日本に分布し、本学とよく似た入学者の分布である。また、広島大学のデータは全学部1510名の学生を対象にしているの、ほぼ平均的な日本の大学1回生の意識が表れているとみなす。尚、世界中のBEVI受検者の平均が50である。

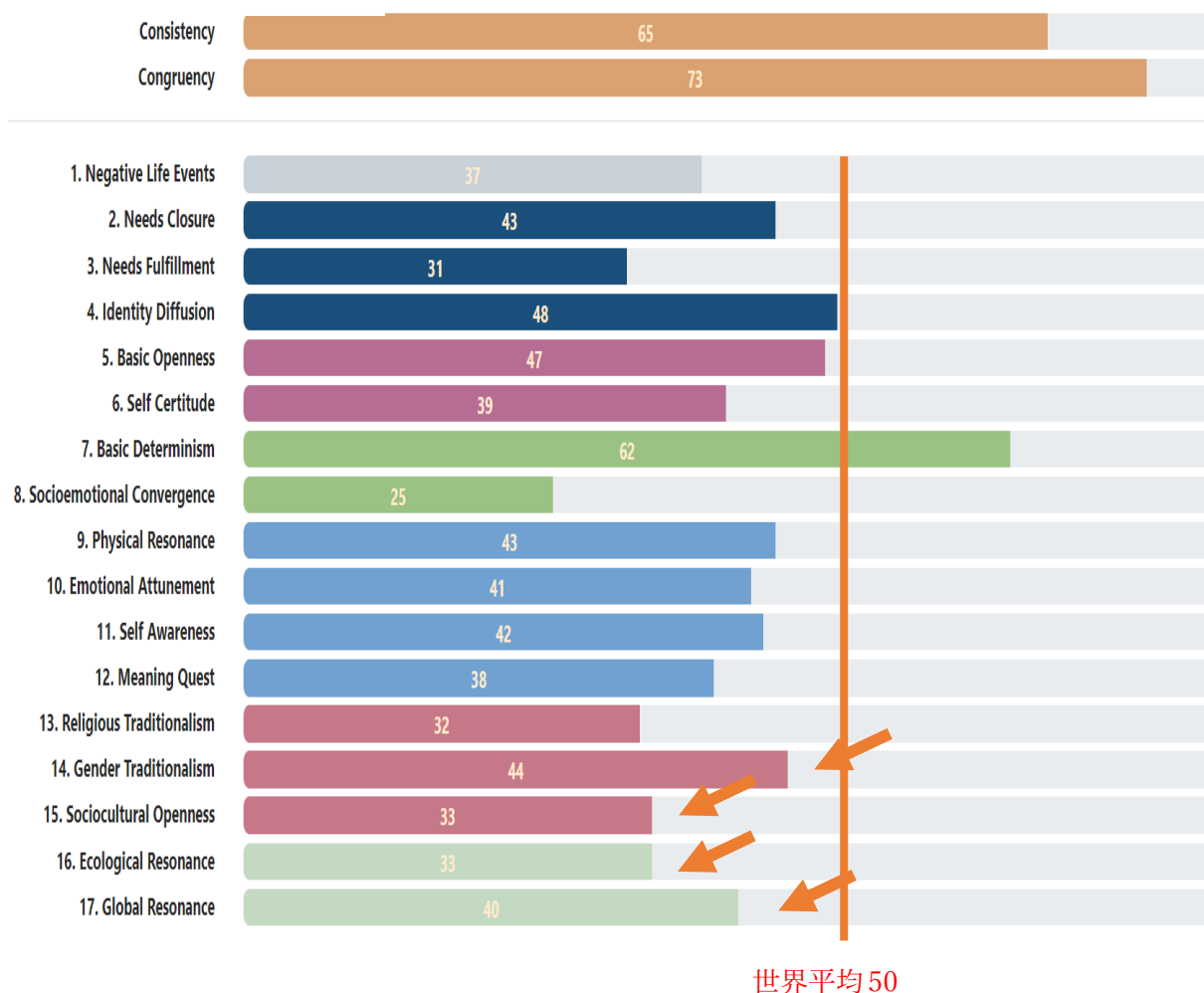
① BEVI 事前調査の結果（TEFL2022に参加した本学英語教育コースの学生10名対照）

表 1：Time 1 (2020. 12. 6) aggregate profile



② 広島大学全学部1回生1510名

表 2 : aggregate profile



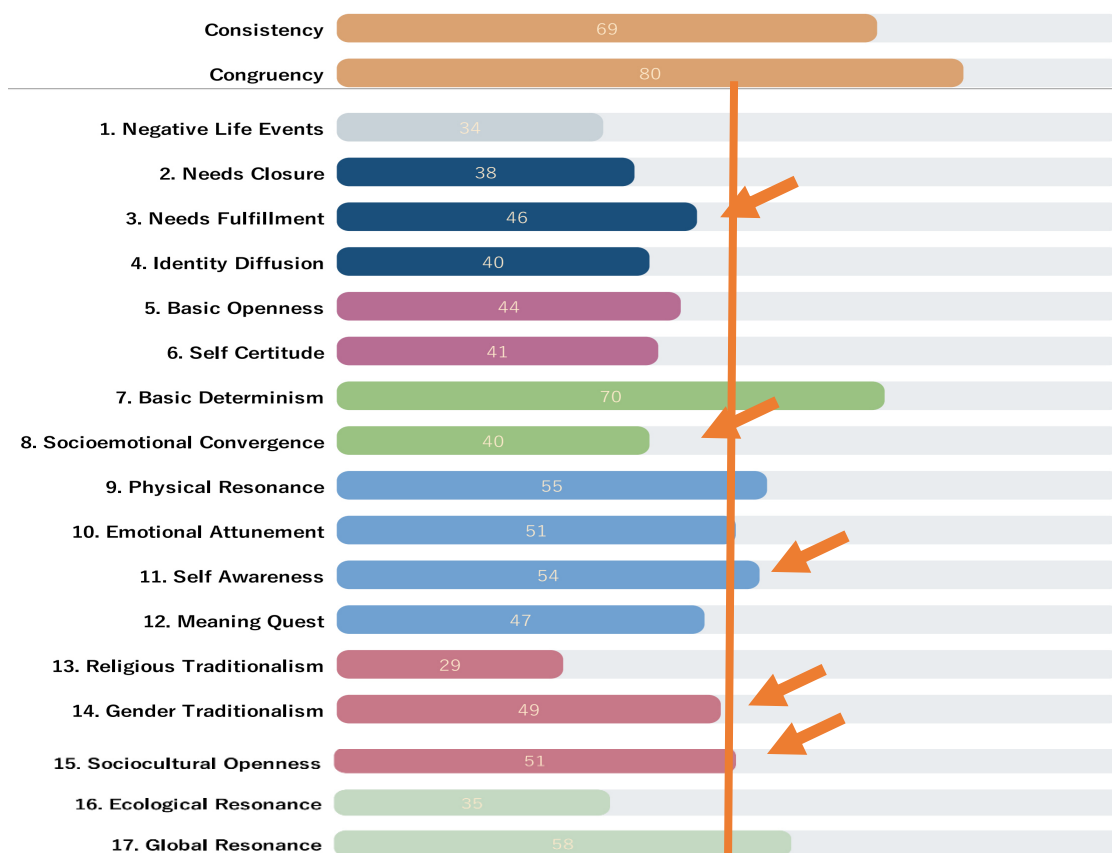
広島大学全学部1回生のデータと比較して、TEFL2022に参加した本学英語教育コースの学生は、「15. 社会文化的オープン性: 文化、経済、教育、環境、ジェンダー/国際関係、政治の分野におけるさまざまな行動、政策及び実践について進歩的/オープンである」では広島大33に対し本学48、「16. 生態との共鳴: 環境/持続可能性の問題に深く関与している。地球/自然界の将来を懸念している」では広島大33に対し本学42、「17. 世界との共鳴: さまざまな個人、集団、言語、文化について学ぶこと/出会うことを努力している。グローバル社会への関与を望んでいる」では広島大40に対し本学59といずれも指標が高いことが分かる。「17. 世界との共鳴」に至っては世界平均の50よりも高い。これは元々英語や外国の文化に興味を持っている者が本学の英語教育コースに入学し、本学で3~4年間英語教育に関連したカリキュラムを受ける中で国際性を涵養し、多様な価値観を受け入れる素養が助長されたと考えられる。只、「14. ジェンダー的伝統主義: 男性と女性はある型に

はまるよう創られている、伝統的/単純なジェンダー観やジェンダーの役割を好む」では広島大44に対し本学54の指標が高いことから、TEFL2022に参加した学生はジェンダーに関して比較的伝統的な価値観を持っていることがわかった。この指標が留学後にどう変化するのか注目すべき点である。

7. BEVI 事後調査と事前調査との比較

① BEVI 事後調査の結果 (TEFL2022に参加した本学英語教育コースの学生10名対照)

表3 : Time 2(2023.3.14) aggregate profile



世界平均50

② 事前・事後調査の国際関心度の比較

表4 : 事前調査 (2020.12.6)

国際的経験への関心度
• 回答:: 10
• 未回答:: 0
• やや高い: 4
• 高い: 6

国際的経験の満足度
• 回答:: 10
• 未回答:: 0
• 中立: 4
• やや高い: 4
• 高い: 2

表5 : 事後調査(2023.3.14)

国際的経験への関心度
• 回答:: 10
• 未回答:: 0
• 中立: 1
• やや高い: 2
• 高い: 5
• 非常に高い: 2

国際的経験の満足度
• 回答:: 10
• 未回答:: 0
• やや高い: 1
• 高い: 6
• 非常に高い: 3

表1と表3を比較し、事後調査では、「3. 欲求の充足：経験・欲求・感情に対してオープン、自分・他者・より広い世界に対する気遣い/思いやり」ではT1:43に対しT2:46、「8. 社会・情動の理解：自己、他者、より広い世界を認識している/オープンである」ではT1:38に対しT2:40、「11. 自己認識：内省的、自己の複雑性を受け入れる、人の経験/状態を気遣う、難しい思考/感情を許容する」ではT1:51に対しT2:54、「15. 社会文化的オープン性：文化、経済、教育、環境、ジェンダー/国際関係、政治の分野におけるさまざまな行動、政策及び実践について進歩的/オープンである」ではT1:48に対しT2:51と指標が少しずつではあるが高まった。

「17. 世界との共鳴：さまざまな個人、集団、言語、文化について学ぶこと/出会うことを努力している。グローバル社会への関与を望んでいる」の指標は元々高かったもので、それほど変化は見られないが、「14. ジェンダー的伝統主義：男性と女性はある型にはまるよう創られている、伝統的/単純なジェンダー観やジェンダーの役割を好む」ではT1:54に対しT2:49と指標の結果が低くなっていることから、著しい変化が見られた。

表4と表5を比較して、「国際的経験への関心度」において、事前調査では「高い」6名「やや高い」4名、事後調査では「非常に高い」2名「高い」5名「やや高い」2名「中位」2名。「国際的経験の満足度」において、事前調査では「高い」2名「やや高い」4名、「中位」4名、事後調査では「非常に高い」3名「高い」6名「やや高い」1名。全体的に見て、関心度、満足度いずれも高まっている。

8. まとめ

広島大学との比較から、ほぼ平均的な日本の大学1回生に比べ、本プログラムに参加した学生は、「15. 社会文化的オープン性」「16. 生態との共鳴」「17. 世界との共鳴」において、元々国際性が高く、多様な価値観を受け入れる素養を持っていたと言える。そのような学生が本プログラムに参加していたとはいえ、事前事後の調査を比較すると、「3. 欲求の充足」「8. 社会・情動の理解」「11. 自己認識」「15. 社会文化的オープン性」の指標の結果が高まったことにより、本プログラムを通して、学生の全体的な傾向として、「経験・欲求・感情に対してオープン」「より広い世界に対する気遣い/思いやりができる」「より広い世界を認識する」「内省的、自己の複雑性を受け入れ、人の経験/状態を気遣い、難しい思考/感情を許容する」「文化、経済、教育、環境、ジェンダー/国際関係、政治の分野におけるさまざまな行動、政策及び実践について進歩的でオープン」といった国際性の涵養、多様な価値観を受け入れる素養が研修以前に比べさらに高まったことが推察できる。特に「14. ジェンダー的伝統主義」を見ると、事前調査結果から広島大学の調査と比べても元々伝統的な価値観を持つ学生が多かったが、事後調査ではその傾向が低くなっていることが分かり興味深い結果となった。どのような要因が学生の意識に変化をもたらしたのか、個々の学生の聞き取り調査をするなどしてさらに研究を深める必要がある。

「国際的経験への関心度」「国際的経験の満足度」において、事前・事後調査の結果を比べると、このプログラムに参加した学生から、関心度、満足度いずれも高い評価を得ていることからこの留学プログラムは概ね成功だったといえる。

今回の調査結果だけでは対象人数が少ないため一般化することは困難であるが、このプログラムを継続することによって、さらにデータを収集・分析し、より正確な調査研究を進めていきたい。また、BEVIの結果に表れる数値の意味を深く研究することにより、学生の留学・オンライン研修の効果及び英語教員としての資質の向上に資する効果を検証していく所存である。